

発達障害児をもつ母親の心理的苦痛と家族レジリエンス

○鈴木浩太^{1,2}・平谷美智夫³・水越菜那¹・林隆⁴・稲垣真澄¹

(¹国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所的・発達障害研究部・²地域・司法精神医療研究部・³平谷こども発達クリニック・⁴西川医院発達診療部・発達障害研究センター)

キーワード：レジリエンス，発達障害，養育者支援

Psychological distress and family resilience in mothers of children with developmental disorders

Kota SUZUKI^{1,2}, Michio HIRATANI³, Nana MIZUKOSHI¹, Takashi HAYASHI⁴, and Masumi INAGAKI

(¹Department of Developmental Disorders, ²Department of Community Mental Health & Law, National Institute of Mental Health, National Center of Neurology and Psychiatry (NCNP), ³Hiratani Child Development Clinic, ⁴Department of Developmental Medicine and Centre for Developmental Disabilities Studies, Nishikawa Clinic)

Key Words: Resilience, Developmental disorders, Caregivers

目的

発達障害児をもつ母親は、育児の中で様々な困難を経験し、精神的な問題を抱えるリスクが高いことが知られている。家族レジリエンスは、困難な状況に家族が良好に適応する過程として定義される概念である。家族レジリエンシー（家族レジリエンスの要素をもつ程度）が母親の精神的な問題を抱えるリスクを軽減する要因になり得ることが予測された。そこで、本研究では、家族レジリエンシーを測定する尺度を開発し、家族レジリエンシーが子どもの発達障害の重症度と母親の心理的苦痛に与える効果を検討した。

方法

研究対象 対象は、注意欠如・多動性障害 (Attention Deficit Hyperactive Disorder: ADHD)、自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder: ASD)、学習障害 (Learning Disorder: LD)、知的障害 (Intellectual Disability: ID) の診断を受けた子どもの養育者 324 名であった。欠損値のない母親 274 名を分析に用いた。

家族レジリエンス要素質問票 (Family Resilience Elements Questionnaire: FREQ) 家族レジリエンス尺度 (得津・日下, 2006) 及び家族レジリエンス測定尺度 (大山・野末, 2013) より、信念体系、組織的なパターン、コミュニケーション・プロセスの各概念から 7 項目を抽出した。計 21 項目について、発達障害をもつ母親 8 名に予備的に調査を行った。予備調査の結果に基づき、質問項目を修正した。また、発達障害の育児に関する 7 項目を追加した。再度、10 名の母親に対して予備調査を行い、質問項目を確認し、本調査に用いた。「1. 全くあてはまらない」～「5. よくあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

質問項目 子どもの発達障害の重症度を評価するために、Impairment Rating Scale (IRS) を用いた。母親の心理的苦痛を評価するために、Kessler 6-items Psychological Distress scale (K-6) を用いた。

結果

FREQ 因子数を決定するために、平行分析と Minimum Average Partial テストを実施したところ、1 因子が妥当であると判断された。最尤法による探索的因子分析を行ったところ、1 項目の因子負荷量が、0.34 であり、残りの 27 項目の因子負荷量が、0.48 以上であった。そのため、27 項目の平均値を FREQ の得点とした。

階層的重回帰分析 K-6 を IRS, FREQ, IRS と FREQ の交互作用項で予測する階層的重回帰分析を行った。まず、K6 を IRS と FREQ で予測するモデルは有意であった ($R^2 = .22$, $F(2, 271)$

$= 38.79$, $p < .01$)。次に、このモデルに、IRS と FREQ の交互作用項を投入したところ、 R^2 が有意に増加した ($\Delta R^2 = .02$, $F(1, 270) = 4.56$, $p < .05$)。

交互作用項を含むモデルでは、IRS, FREQ, IRS と FREQ の交互作用項が K-6 を有意に予測していた ($p < .05$)。交互作用項について詳細に検討したところ (図), FREQ が +1SD 高い ($b = .11$, $p < .05$)、平均 ($b = .17$, $p < .001$)、-1SD 低い ($b = .25$, $p < .001$)、-2SD 低い ($b = .32$, $p < .001$) 場合には、IRS が K6 を予測しているが、+2SD 高い場合には、IRS と K-6 の関係性が認められないことが示された。

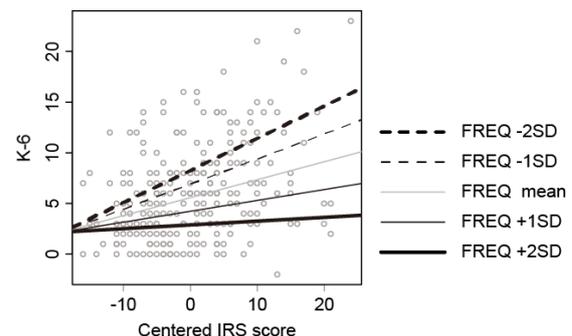


図. 子どもの発達症状の重症度 (IRS) と母親の心理的苦痛 (K6) の関連性に対する家族レジリエンシー (FREQ) の効果

考察

K-6 を予測する階層的重回帰分析では、IRS と FREQ の交互作用項が有意であり、FREQ が高い場合に、IRS と K-6 の関係性が認められないことが示された。つまり、子どもの発達障害の重症度が高いと母親の心理的苦痛が高い関係性があるが、家族レジリエンスが高い家族では、子どもの発達障害の重症度が高くても母親の心理的苦痛が増大しないことが明らかになった。家族レジリエンシーが高い家族では、母親以外のメンバーも、適切に子育てに関わることができているため、母親の子育ての負担が軽減されることが想定された。

引用文献

- 大山寧寧・野末武義 (2013). 家族レジリエンス測定尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 家族心理学研究, 27, 57-70.
- 得津慎子・日下菜穂子 (2006). 家族レジリエンス尺度 (FRI) 作成による家族レジリエンス概念の臨床的導入のための検討. 家族心理学研究, 20(2), 99-108.